



西小校長室だより

令和7年度 7月号

(文責 妹尾)

【※西小ホームページのアーカイブを抜粋・加筆しています】

コウノトリ ヒナの名づけ発表

6月20日(金)に、西小巣塔のコウノトリのヒナの名づけ決定を発表するために、雲南市長と雲南市教育長が来校されました。今年西小では3羽のヒナが誕生しましたが、そのうち2羽の名前を本校から提出した4つの候補から選ばれました。市長からの発表に先立ち、6年生が名前を考えるに至るまでのコウノトリエトセトラについて、市長と教育長のお二人に向けてプレゼンテーションを行いました。伝えたのは①「げんきくん」ペアの変遷・ペアの交代 ②今年のヒナのふ化から巣立ちまで ③コウノトリに関する各学年の取組 ④コウノトリクイズ ⑤名づけの候補→4つ絞ったそれぞれの名前の意味 の5部門です。プレゼンの仕方もリハーサルを通して数段上手くなり、しっかり思いが伝わる発表でした。

今回の発表の場には複数のテレビ局、新聞社が取材にられました。プレゼンの途中には5年生のときにチャレンジ田んぼ(コウノトリのえさ場にもなっている)で収穫したお米を市長と教育長にプレゼントしました。6年生のプレゼンが終わると、市長からいよいよ名前発表です。決定した名前は「ピース」(平和になってほしい願い)と「かなで」(西小のみんなも含め美しい歌声を奏でる願い)でした。教育長や市長からは、誰よりもコウノトリについて



知っていることに誇りも持ってほしいという話や、今後雲南市で増えていくコウノトリと人間が共存するための方法を考えてほしいといったお話をいただきました。発表会が終わったあとは、子どもたちが報道の方からの取材攻勢を受けました。「ピース」の名づけをした子にはヒーローインタビューばりの囲み取材です。取材を受ける女子たちも、まんざらではない感じ!!なかなかこんな体験はないですね。6年生のみなさん、おつかれさまでした。

よい姿勢ってどういうこと?

6月30日(月)の2校時に高学年、3校時に低学年、4校時に中学年が「良い姿勢ってなに?」をテーマに、自分たちの姿勢に関する学習を行いました。講師には、雲南市立病院リハビリテーション技術科理学療法士の影山さん、石原さん、身体教育医学研究所うんなんの北湯口副所長にお越しいただきました。まず、悪い姿勢、特に猫背は何が良くないのかを考えました。①カッコ悪い②体の不調(呼吸が浅くなる、腰痛・肩こり、内臓への負担)③集中力不足 等が主な理由として挙がり、②の呼吸について実際の動きの中で確かめてみました。そして、よい姿勢で座るための体の仕組みをみんなで考え、朝の活動時間や体育の時間にやってみるとよい運動も教わりました。大事なポイントは、座ったときに体を「お尻の骨で支える」ことです。またその姿勢を維持するための体幹や筋力、バランスを高めるエクササイズも一緒にやってみました。姿勢が良いことは、体にも心にも良く、集中力も上がり、見た印象も良いと、良いこと尽くめです。データによると、姿勢が良いと言われている人はほとんどが日々意識・習慣・努力を積み重ねている人たちです。学校ではもちろん、ご家庭でも、姿勢を意識する機会を増やしていければと思います。



盛りだくさんの学習公開日

7月1日(火)は、今年度2回目の学習公開日でした。授業公開に先立ち、PTAの救急法講習を行いました。雲南消防署から2名の救急救命士にお越しいただき、目の前で倒れた人の命をつなぐための胸骨圧迫や人工呼吸、AEDの正しい使い方を学び合いました。5校時の授業公開は、健康や性に関する学習を見てもらいました。1年生は食の学習、2年生は健康な歯の学習、3年生はそれぞれの「らしさ」についての学習、4～6年生は性の



多様性についての学習内容です。親が来てくれている



うれしさや、見られている緊張感に包まれながらも、真剣に授業に取り組む子どもたちでした。授業が終わると、地区ごとに場所を移し、「校外児童会」を行いました。今回は保護者の

の皆さんも参加され、登下校や夏休み中の過ごし方などについて一緒に話し合っていました。地域の子どもの育てる視点で、大人が声を掛け合える環境関係は素敵だと思います。公開日の最後は引き渡し訓練で



した。これは洪水等の災害や不審者事案などの緊急時の引き渡しの大きな流れを理解する訓練です。今回の訓練を反省・検証し、実際に起こり得る様々な事態に備えていき

たいと思います。盛りだくさんの1日となりましたが、お越しいただいた保護者の皆さん、長時間に渡りありがとうございました。

校長所感 ～つながって生きる～

私たちは日々、様々な人と関わりながら暮らしています。かつての「ムラ社会」のような地域共同体という概念は薄れつつありますが、無意識に誰かの目や誰かの言葉を意識しながら生活しているはずです。それが会社の人だったり、近所の人、趣味の遊び仲間だったり、子どもで言えば学校の友だちや先生だったりします。また、親子関係も然りです。

一方、現代では、コンビニやネットショッピングで必要な物をそろえ、オンラインで仕事をするなど、物理的に誰とも付き合わずに生きることも選択可能です。煩わしい人間関係を気にしないで、思うがままに過ごすという生き方も可能かもしれません。多様な生き方という観点ではそれも有りなのでしょうが、私はどうしてもそこに寂しさを感じてしまいます。より良い人間関係を築きながら、多くの人と共感し、様々な人の思いに囲まれて暮らしたいと思っているからだと思います。

このことに関して、私はある興味深い考え方に出会いました。現在の複雑な人間関係にフォーカスし分析されている医学博士で心理学者の松村亜里氏の著書です。そこには『トラブルや厄介な人間関係は、すべて「犠牲者」「迫害者」「救済者」の三者によって話が進んでいる』と書かれています。同様に精神科医のカープマン氏も「自分のところに来る人間関係に困っている人は全員がこのトライアングルに当てはまる」として、DDT(恐怖のドラマトライアングル)という説を提唱されています。(詳細は割愛します)

①「犠牲者」…【自信を喪失し問題を抱えている人】

②「迫害者」…【犠牲者の問題原因となり他を非難しがちな人】 ③「救済者」…【相手のことより問題解決を優先し独りよがりな人】

この3者が負のスパイラルに陥ると、なかなか抜け出せません。アニメ「ドラえもん」を例にすると、のび太は「犠牲者」で、ドラえもんは「救済者」、ジャイアンが「迫害者」となります。ドラえもんは、問題の起こったのび太のために、道具を出して何度も助けますが、その後も常に状況と関係性は変わりません。犠牲者は常に犠牲者のままです。



私が最も注目するのは、「救済者」は果たして本当にいい人なのかという点です。ヒーローな訳ですから「犠牲者」からはもちろん、周りからもいい人に映ります。しかし一方で、のび太のように、問題を自分の代わりに解決してくれるから、自分で問題を解決する能力が身につかないという弊害にもなっているのです。さらに言うと、「救済者」ができない人と決めつけることで、「犠牲者」の無力感も高まってしまいます。

▽毎日のように忘れ物を指摘し、学校に届けに行く。

▽創作活動で、ハサミは危ないからと、材料をすべて大人(親、教師)が準備する。

▽授業の中で、テーマと称しながら、活動内容をほぼ限定してしまう。

など、無意識のうちに、支援ではなくヘルプをしてしまっているケースが多々あるように思います。

本当に救済が必要な時は別ですが、援助を求めてないのに、また、その人ができるかどうかも確かめないで、**親切の先回り**をしてしまうのです。「助かった、あなたがいないと…」と頼られることで、「救済者」は安心感や自己肯定感を高めようとしているのかもしれませんが、しかし、「犠牲者」は逆に無力感を強めます。

大切なのは、ヘルプではなく、「そんなにつらいのによく話してくれたね」といった共感です。そして「今なぜ頑張っているの?」というコーピングクエスチョンも有効な対応の一つになるかもしれません。本当に辛いときには「もう自分には何も無い」と考えがちですから、「ある」に目を向け、相手の未来に耳を傾けたいものです。今が最悪なのではなく、よき未来のために必要な今、何をすべきか、親子や家族、学校で共に考えることが大事なのだと思います。

私は、人とのつながりを尊いと感じながら生きることが、豊かでより良い人生に結びつくものと信じています。子どもたちへの関わり方においても、保護者の皆さん、地域の皆さん、教職員とともに今後も模索していきたいと思っています。

さあ 夏休みです!

長い休みならではの「ワクワク」の過ごし方ができるといいですね。交通事故や熱中症に気をつけ、有意義な夏休みになしてください。



学校のホームページの「児童の様子」更新を、夏休み中は休止します。2学期からまたご覧ください。